

日本グループ・ダイナミクス学会会報

JGDA

ぐるだいい ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 58 号

(2021 年 2 月 15 日)

発行所：立正大学心理学部 西田公昭研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：西田公昭

編集担当：杉浦淳吉

訂正 優秀論文賞の対象年度の表記に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
誤) 2020年度 正)2019年度 (2021.3.22訂正)

目次

☆ 名誉会員の推戴	2
☆ ¹⁹ 2020 年度 優秀論文賞	4
☆ 小特集『コロナ時代のグループ・ダイナミクス研究』	5
☆ 事務局からのお知らせ	11
☆ グルダイ学会関係連絡先	15

名誉会員としての回顧

吉田俊和 (岐阜聖徳学園大学)

このたび、名誉会員として推戴していただき、会員みなさまに感謝申し上げます。

私が初めてグルダイ学会に参加したのは、1973年の秋でした。年末には、オイルショックでトイレットペーパー騒ぎがあった年でした。当時は、日本心理学会の前日に開催されるのが常でした。規模も小さく、確か中野サンプラザの2部屋で、合計20ほどの発表でした。

印象的だったのは、発表取り消しがあった時、その枠を使って、三隅二不二会長がPM理論の講義をされていたことでした。学会への参加が初めてだったので、取り消しの意味も分からず、そういう時には、会長と呼ばれる人が代役を務めるのだと勝手に思っていました。

何よりも、自分が社会心理学を学ぶきっかけが、学部2年生の時に読んだCartwright & Zanderの『グループ・ダイナミクスⅠ・Ⅱ』であり、その翻訳者である三隅先生というのは、この人なのかというのが一番の興味でした。他にも、その本を訳した先生方が発表者として登壇され、自分も何だか研究者になったようで嬉しかったことを記憶しています。

私の指導教員からの刷り込みで、社会心理学会は社会学系、グルダイ学会は実験社会心理学系ということで、グルダイ学会にはほぼ毎年参加していましたが、社会心理学会に初めて参加したのは1988年に名古屋大学が主催校になった時からでした。ということで、私にとっては、このグルダイ学会こそが研究者として歩み始めた原点でした。グルダイ学会は、国際化にも早くから取り組み、1979年には京都国際会議場でDeutschやKelleyを招聘してシンポジウムを開催し、1997年には同じ場所で第2回アジア社会心理学会を開催しています。しかし、この開催費用の後始末から学会費の大幅値上げの責任問題や学会論文のあり方をめぐって大論争が起き、1998年の大会総会は大荒れになり、大会主催校の事務局長として大変困惑したことを覚えています。これがきっかけとなり、退会者が続出し、規模として社会心理学会の後塵を拝することになってしまい心が痛みました。こうした過去のしがらみとは関係のない若い研究者の皆さんは、日本や世界の社会心理学の一層の発展を担うべく、今後ともご精進いただければ幸いです。

名誉会員推戴の報を受けて

外山みどり (学習院大学)

このたび日本グループ・ダイナミックス学会名誉会員に推戴していただき、たいへん光栄に存じますが、正直なところ、お知らせを頂いたときには驚きを禁じ得ませんでした。と申しますのは、私が常任理事を務めたのは20年以上も前で、その後は監査を2度経験した以外は何の貢献もしていないからです。そしてその20数年前、具体的には1996年に当時の杉万会長が私を常任理事に指名されたのは、学会の財政状況が苦しく、常任理事会の交通費を節約するためだったのではないかと推察されます。私は当時、事務局があった奈良大学に近い大阪在住でした。このような経緯で名誉会員にして頂くならば、申し訳ないような気がいたします。

私がグループ・ダイナミックス学会に入会したのは大学院生だった1975年、初めて研究発表をしたのは1977年に東京大学で開催された第25回大会でした。当時のプログラムを見ますと発表は23件、シンポジウムも含めて2日間、1つの大教室で行われています。翌年の島根大学での大会では発表が39件と急増していますので、この大会が特に少なかったのかもしれませんが、当時の“グルダイ”は小規模で雰囲気の良い学会でした。発表会場では、会長の三隅二不二先生が最前列に陣取っておられ、私の時もそうでしたが、若手の発表には必ず質問をなさいました。これは初めて学会発表をする大学院生にとって、緊張の瞬間であると同時に暖かい励ましでもありました。

私自身は院生時代から原因帰属や社会的認知をテーマとしており、集団研究とは縁が薄いと思われるかもしれませんが、学部時代に最初に関心をもったのはシェリフの集団規範形成の実験であり、初めて書店に注文を出して購入した心理学の図書はカートライト&ザンダー (三隅・佐々木訳編)『グループ・ダイナミックスⅠ・Ⅱ』でした。今でも集団の雰囲気を直接測定する方法はないだろうかなどと時折考えたりしております。学会は私が入会した頃とは比較にならないほど大きくなりましたが、今後も会員間の交流が密な居心地の良い学会として発展を続けて頂きたいと願っております。

選考プロセスと結果の報告

機関誌編集担当常任理事
北村英哉 (東洋大学)

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第59巻1号、2号に掲載されました原著5編、資料2編、ショートノート5編の計12編でした。これらから優秀とみなされる論文3編を審査者おのおのが選び、1位から3位まで順位づけをしていただく依頼を、著者にあたる1名を除く編集委員全員に7月23日にお送りし、締め切りの9月25日までに20名から事前審査結果をいただきました。規程に従い、1位に3点、2位に2点、3位に1点を付して合計得点を算出しました。その結果をもとに12月13日に優秀論文賞選考委員会を開催し、協議を行い、以下の1編の優秀論文賞授賞が決定しました。受賞者の先生、おめでとうございます。

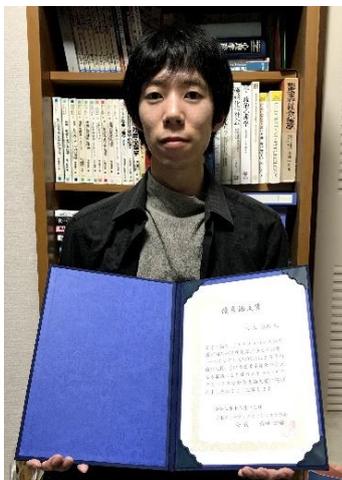
受賞者の声

松木祐馬 (早稲田大学)

テキストベースの討議が個人の態度変容に与える影響

—— ベイジアン ANOVA による平均値の比較 ——

⁵⁹
(第98巻2号所収: <https://doi.org/10.2130/jjesp.1822>)



この度は、伝統ある日本グループ・ダイナミクス学会の優秀論文賞を賜り、大変光栄に存じます。研究の実施や論文の執筆にあたり、御指導下さった松本芳之先生、分析方法について貴重な御意見を下さった豊田秀樹先生、また、大変お忙しい中、常に迅速で的確な御指摘・御提案を下さいました査読者の先生方に、深くお礼申し上げます。このような賞を頂戴できたのは、先生方の御協力のお陰です。重ねて厚くお礼申し上げます。

本研究は、インターネットが広く普及し、多くの人たちがオンライン上で見知らぬ人と討議をする機会が増加していることに着目し、テキストベースで行われる討議を行うことで、討議参加者個人の態

度がどのように変化するのかについて、近年注目を集めているベイズ的アプローチを用いて検討したものです。本研究の結果からは、テキストベースでの討議は対面状況での討議と類似した態度変容が生じることが示唆されました。現在は、テキストベースの討議場面を単純に閲覧する状況での態度変容にも射程を広げて研究を続けています。

今年度は、新型コロナウイルス (COVID-19) の影響から、みなさまが大変にご苦労されていることかと存じます。ですが、学会からもいち早く新型コロナウイルスに関する研究の奨励が行われましたように、グループ・ダイナミックスの観点からコロナ禍で生じるさまざまな問題解決に役立つ知見を、私たちは提供できるものと思います。本研究における関心の中心となるテキストベースでの討議という状況も、テレワークをはじめとする業務のオンライン化に伴い、(研究開始当初は全く想定しておりませんでした) 今後はさらに増加していくものと推察されます。そのため、本論文に係る研究を進めていくことも、コロナ禍における問題の解決に資する知見を提供できるのではないかと考えております。今回頂戴した賞を励みに、より一層研究に邁進していく所存です。

最後になりましたが、本論文を御推薦下さりました先生方に深く感謝申し上げます。修士課程に進学した時に、最初に所属を決めた学会が日本グループ・ダイナミックス学会であり、初めて所属した学会からこのような名誉ある賞を賜りましたことを、大変嬉しく思います。改めて、深くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。今後も、先生方から御指導・御鞭撻を賜れますと幸いです。どうか何卒よろしくお願い申し上げます。

☆☆☆ 小特集 ☆☆☆

コロナ時代のグループ・ダイナミックス研究

広報担当常任理事

杉浦淳吉 (慶応義塾大学)

例年、学会の年次大会後に発行するぐるだいニュースでは、大会での優秀発表賞の受賞者からコメントや参加記を寄稿していただくことで誌面をつくってまいりました。今年度は、新型コロナウイルスの感染症拡大によって残念ながら年次大会を中止せざるを得なくなりました。大会報告にかわる誌面の内容を常任理事会のメンバーで議論する過程で、このコロナの時代におけるグループ・ダイナミックス研究について、ぐるだいニュースでの特集を企画しようということになりました。この状況下、今年度は新型コロナに関連した研究に対する助成事業を学会として企画し、前号では、採択された4名の会員の方々に研究の背景や目的などをご報告いただいております。

そこで、今回は、研究助成で採択されたその4名の方々に、「コロナ時代のグループ・ダイナミクス研究」と題し、まさに実践としての研究の中間報告にくわえ、研究の意義や課題、工夫されている点など、通常の研究発表には登場しないような内容も含めてご披露いただくことにしました。また、常任理事会でこの本特集を議論する中で、広報担当の杉浦がドイツに在外研究中ということで、その報告をしたらどうかという提案もありましたので、最後に本特集の観点から滞在記を書かせていただきました。

コロナの時代における諸問題とどう向き合い解決につなげていくのか、グループ・ダイナミクス研究の役割や課題について、本特集が今後の議論の契機となれば幸いです。

コロナ禍における研究の方向転換

鬼頭美江 (明治学院大学)



今号では「コロナ時代のグループ・ダイナミクス研究」というお題をもとに、執筆の機会をいただきまして、ありがとうございます。まず、新型コロナウイルスに関連した研究助成をいただいた研究については、現在、分析を進めております。他の業務に追われ、研究に十分な時間が取れず、もどかしい限りですが、少しずつでも進めていけるよう細切れの時間を活用しようと努めております。まだ分析中であるため、結果の詳細につきましては、今後、年次大会等で発表させていただきます。

このコロナ禍での研究実施に際し、臨機応変な対応が求められている研究者の方々も多いのではないのでしょうか。私は恋愛関係や友人関係などの対人関係を専門としており、近年は、主に関係形成を対象とした研究を行っています。今年度も実験室での対面実験を予定していましたが、新型コロナの影響でやむなく対面実験を諦め、実験デザインの大幅変更を余儀なくされました。

SNSやマッチングアプリなど、インターネット上での関係形成場面が増えてきているため研究テーマとして関心はあったものの、なかなか手を出すことができずにいました。外出自粛によってコミュニケーションの大部分がオンラインに移行している中、対面実験が実施できない現状を、オンライン上での関係形成のあり方を検討する絶好の機会と捉え、当初予定していた対面実験をオンライン実験へと移行することにしました。

実験参加者だけでなく、私たち研究者にとっても慣れないオンライン実験であったため、実験を始めた当初は、想定外のトラブルも多くあったのですが、新たな研究環境に適応するために時間や手間がかかるのは当然なのかもしれません。このままでは当初の仮説を検証することすら危

ぶまれているのですが、このような困難を経て、今後も利用可能なオンライン実験の手法を確立できるのであれば、それだけで十分意義があるのかもしれないと感じ始めています。研究というのは予定通りに進まなかった時にどのようなに対応するのかという創造性が問われます。コロナ以前には考えられなかった（あるいは、考えることを避けていた）アイデアについて、このような状況下だからこそ研究できたのだと、現在の困難な状況において少しでも前向きに考えていきたいものです。

コロナ禍での研究はいかにしてはじまり、進んだのか

小森めぐみ（淑徳大学）

年の瀬が近づいたころ、中間報告の原稿依頼を拝受した。助成を頂いた研究は、研究助成の募集が出たときにはすでにデータを取り終わっていた（遡及的な応募も可としてくださった学会に感謝！）。だから、今はもう中間報告というより結果をまとめていないといけない時期である。調査をした時期は3月の終わり。海外では多くの国々が緊急事態宣言の発令に踏み切っており、日本も今か今かとなっている時期だった。共同研究者とのメールを読み返すと、別件の打ち合わせの中で3/11に調査ができないかと初めて言い出し、彼らを引きずり込んだようだ。その時にはこの騒ぎがこんなに長引くと思っていたいなかったので、今しかないと思っていた。要するに、「コロナ禍」という希少性の影響を受けたのである。

研究の内容は、「知ってるつもり（主観的知識）」と「ちゃんと知ってる（客観的知識）」を区別して、新型コロナ関連の知識とリスク認知、予防行動の関係を調べるというものだ。このアプローチでの研究は長年続けていたので参考にできる調査票があったことも実施にふみきれた一因である。当時は育休中だったので（その割に夫の育児分担が多かった気もするが）学務を大幅に免除されていたことも大きかった。勢いだけで突っ走る私の穴だらけの作業は、共同研究者の迅速かつ冷静なコメントのおかげでなんとか崩壊せずにここまで来ている。まとめると、希少性原理+調査票の使いまわし+冷静な共同研究者+（運よく）少ない学務と家族のサポート＝この研究というところだろうか。

オンライン授業準備の現実逃避で行った分析をごく一部だけ報告すると、当時の健康リスク認知にもっとも強く影響していたのは、新型コロナへの関心だった。主観的知識と客観的知識は相関しているが、その程度はそれほど強くない。これらも含め色々な結果を得ているが、スピード重視の研究であったため解釈は難しい。無理せず結果の報告に徹してまとめるつもりでいる。が、まだできていない。「まとめるつもり」と「ちゃんとまとめた」は、やっぱり違う。さて、どうしたものか...

研究の経過報告および「オンライン」に関する所感

宮島 健 (奈良大学)



コロナ禍におけるテレワークの利用とワーク・ファミリー・コンフリクトや精神的健康、そしてセルフコンパッションとの関係について検討することを目的とした調査は、既に完了しています。本研究助成は、遡っての申請が可能ということでしたので、実は6月中にデータ収集を完了させておりました。申請が通らなければ、別のところから調査費を捻出せねばならなかったもので、採択していただき、とても感謝しております。データの詳細な分析は、大学の授業準備や成績評価が(おそらく一旦は)落ち着くであろう年度末に集中して行う予定です。来年度のグルダイ大会において、興味深い研究成果を発表できればと思います。

コロナ禍では、対面での実験や調査が大きく制限を受けているために、オンラインでのデータ収集や二次分析といった研究アプローチに対する関心や価値が高まったと感じています。オンライン調査は、確かに大規模なサンプルを対象として、態度や社会的認知などを効率的に測定するうえで威力を発揮します。ただ、こうしたデータは個人の心理変数の「静的な」側面を捉え、扱うには長けているのですが、グループ・ダイナミクスが標的としている集団内の相互作用に基づいた「動的な」側面を捉えるには、難しさを感じているところです。くわえて、クラウドソーシングサービスやweb調査会社を用いたオンライン調査は、効率的かつ大規模なデータ収集と引き換えに、サンプルの代表性の問題から、得られた知見の一般化可能性が十分に担保できないという点が課題だと感じています。

多くの学会が中止や延期に追い込まれましたが、オンライン上で学会や研究会等を実施する例も多く見受けられました。議論の場をオンライン上に移行することで、研究者間の交流はむしろ、対面限定のときよりも活発になっているのでは、とさえ感じます。今後、研究に関するノウハウを研究者同士で共有する動きがより一層高まり、そうした相互作用から、大きな発見が生まれることを期待しています。

コロナ禍での研究活動をふり返って

高松礼奈 (京都大学)

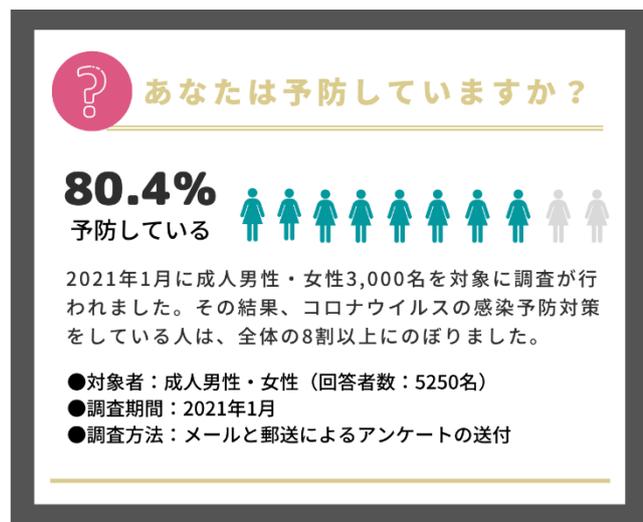
こんにちは、高松です。まずは、本研究の進捗を報告します。2020年夏に日本人とアメリカ人を対象に第1回目調査を行い、感染予防行動のモラル化を予測する変数(感情とモチベーション)を明らかにしました。その後、研究会で発表する機会が複数あり(高井次郎先生と研究室の



皆さま、12月下旬のお忙しい時に発表の機会を頂き、ありがとうございました(結果についてたくさんの方と議論することができました。今後の調査では、モラル化の行動予測性と記述的規範の効果を調べます。具体的には、規範意識を操作して感染予防に対する協力意識やモラル化に与える影響を調べます(図は刺激一部)。

振り返ると、新しい環境への順応が試される一年でした。幸い、コロナ感染拡大による研究活動への支障はあまりありませんでしたが、オンラインへの切り替えには時間と労力がかかりました。そのなかで、私はなるべく「できる」ことに努めて目を向けて取り組みました。京都にいながら、海外の共同研究者とオンラインで対話できる。居間(Zoom)で研究発表ができる。オンライン講演会はどこでも参加できる(今年度は所属オフィスの講演会の広報やHP構築を担当しました。昨年度と比較し、およそ5倍の参加がありました)。オンラインで海外大学のセミナーが受けられる...できることに光を当てると、次世代の研究活動はよりバーチャルな世界になるのでは、と思いを馳せています。

最後に、この課題はCovid感染予防のモラル化をテーマとしていますが、感染予防を社会全体で共有する上位目標の伴う協力的行動としたとき、Covid感染予防だけでなく、環境保護も含めて、個々人の協力が求められる持続可能な開発目標と結びつけることができます。また、今回のプロジェクトは隣接する道徳のテーマはもちろん、グループダイナミクスの幅広いテーマに通じるのではと思っています。今年の学会大会での発表と議論を楽しみにしています。



ロックダウン中のドイツ滞在から見えてくる課題

杉浦淳吉 (慶應義塾大学)

2021年1月現在、ドイツではロックダウンが続いています。当初2020年4月から1年間の在外研究の予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で国境も封鎖され、渡航待機を余儀なくされました。7か月遅れの2020年11月に渡航ができましたが、ドイツでの感染の急拡大により、到着日の11月2日から飲食店の営業が禁止される等の部分的ロックダウン、12月16日には生活必需品以外の小売店の営業も禁止されるロックダウンとなり、現在に至っています。

今回の滞在での研究テーマは、社会の分断と統合に関するゲーミング研究でしたが、この状況

下では想定していた計画どおりの研究を進めることは難しく、研究活動そのものをどう位置づけ、何を行っていくのか自体が大きな課題です。幸い、私自身は日常的な消費行動や環境配慮行動をテーマにしてきています。日々、スーパーに食料品など買い出しにいきますが、スーパーはこれまでの研究でも商品の容器包装の研究や、省エネのマネジメントの研究など、メインフィールドの1つでした。これまでも何度となく調査や学会発表でドイツにやってくる度に、スーパーに立ち寄るのは重要な調査活動の1つでした。それを毎日、生活者の視点から定点観測できることを幸せに感じています。

生活自体が研究フィールドだとしても、それをどう研究につなげるかの視点が必要です。例えば、ドイツの人々はコロナ以前にマスクをつける習慣はなかったのが一転してその徹底ぶりに関心が引き寄せられますが、それを社会心理学的にどう捉えるのか、といったことです。それに反対の意見を意味する行動をとる人々もある訳ですが、多くの人々が政府の定めたルールを守る行動をとっています。それが人々にどう受け入れられているのか、日々の観察を通じて考察することは、私が社会心理学の研究者である以上、必然的なことです。ただ、そうした観察と解釈にはバイアスが生じることも当然想定しなくてはなりません。また、自分自身の安全と健康に十分注意し、ドイツの法律や規制は守る必要もあります。

ここで私がふと考えたことは、今の自分の生活はある種のゲーミフィケーションと捉えることができるのではないか、ということです。ゲーミフィケーションとは、現実世界をゲームと捉えて問題解決を目指す取り組みとすることができます。そこでのゲームの目的はドイツ滞在の研究成果を得て生きて帰国するということです。私はこれまで、ゲームを使った問題解決手法、すなわちゲーミング・シミュレーション研究を行ってきています。これは、ゲームを一つのモデルと位置づけ、現実と切り離れた安全な空間の中で繰り返し広げられる経験をもとに、現実世界の問題にどう対処していくのか、という点でゲーミフィケーションとは一線を画します。ゲームの世界は、いわば抽象的な世界である実験室実験に置き換えて捉えることもできる訳です。他方、ゲーミフィケーションはアクションリサーチと捉えることもできます。自分がゲームのプレイヤーとして振る舞うことによってゲームの世界を理解することも一つの目標ではありますが、そのプレイヤーを分析するメタ的視点の必要性を考えれば、コロナの世界としてのドイツでの経験から抜け出した時に、その経験を振り返る「ディブリーフィング」として、どう言語化していくのかということが課題であると思うに至っています。

ゲームの途中ではありますが、ロックダウンの非日常的世界を日常の視点からみると、ゲームの中の世界では当たり前に見えることも、当たり前ではないことに気づけます。ここで得た視点を今後の研究に生かしていきたいと考えています。

☆☆☆ 事務局からのお知らせ ☆☆☆

次期役員選挙結果について

次期役員選挙が完了しました。選挙管理委員のみなさま、ご投票いただいたみなさま、どうもありがとうございました。また、次期役員のみなさまどうぞよろしく願いいたします。

開票作業日時 12月6日(日) (11:00より開封作業、途中休憩をはさんで16:00まで)

作業場所 広島大学東千田キャンパス 503教室

注) 名前はいずれもアルファベット順

会長

北村英哉

常任理事

藤村まこと

橋本 剛

五十嵐祐

中島健一郎

尾崎由佳

坂田桐子

地区別理事

北海道・東北

次点

森 直久

辻本昌弘

次々点

高橋伸幸

関東

次点

埴田健司

相川充

橋本剛明

次々点

工藤恵理子

中部

次点

五十嵐祐

小川一美

次々点

石井敬子

近畿

次点

谷口淳一

竹内みちる

矢守克也

次々点

加藤潤三

中国・四国・九州・沖縄

次点

中島健一郎

原田純治

坂田桐子

次々点

(辞退1名)

木村堅一

全国区理事

藤村まこと	橋本 剛	加藤謙介	
三浦麻子	宮本 匠	尾崎由佳	
鮫島輝美	山口洋典	結城雅樹	
次点	村本由紀子	次々点	樋口匡貴

監査

西村太志	山口裕幸	(辞退1名)	
次点	西田公昭	次々点	村田光二

会長指名理事

浅野良輔	大坪庸介	太幡直也
------	------	------

備考

投票総数 140 通 (有効投票 138 通)

有効投票地域内訳 北海道・東北 11 通 関東 28 通 中部 30 通 近畿 37 通
中国・四国・九州・沖縄 34 通

※ 得票同数の場合は、選挙管理委員会による抽選によって決定した。

※ 辞退者については、その理由を選挙管理委員会で検討し、やむを得ないものとして承認した。
その上で次の得票者以降を繰り上げた。

日本グループ・ダイナミックス学会 (2021～2022 年度) 選挙プロセス

役員選挙方法の変更点

(1) 地区区分の変更

北海道・東北 (各 1 名、合計 2 名) → 北海道および東北 (1 名)

中国および四国

・九州および沖縄 (各 1 名、合計 2 名) → 中国、四国、九州および沖縄 (合計 2 名)

(2) 会長指名理事を 2 名から 3 名へ変更

(3) 投票締め切りを必着から当日消印有効へ変更

役員選挙日程

- 9月29日(火) 選挙台帳(案)をweb上に掲載 → 新規
～ この間、選挙台帳(案)異議申立期間
- 10月19日(月) 選挙台帳確定
- 10月19日(月)～26日(月) 選挙台帳の作成、校正、印刷
- 11月9日(月) 役員選挙(会長、理事、監事)の投票用紙、選挙人名簿などの送付
- 11月30日(金) 投票締め切り
- 12月6日(日) 広島大学東千田キャンパスにて役員選挙(会長、理事、監事)開票
- 12月7日(月) 当選者への当選及び承諾連絡
- 12月10日(木) 会長へ指名理事の指名依頼
- 12月20日(日) 被選出理事への会長指名理事の承諾依頼
- 12月23日(水) 新理事への常任理事の選出依頼
- 1月8日(金) 会長ならびに被選出常任理事への指名常任理事の指名依頼
- 1月15日(金) 全理事確定

選挙管理委員会

- 選挙管理委員長 西村太志(広島国際大学)
- 事務局長 相馬敏彦(広島大学)
- 選挙管理委員 小玉一樹(福山平成大学)
- 選挙管理委員 橋本博文(安田女子大学)

実験社会心理学研究 2020年度60巻2号 — 掲載予定論文

(2021年2月発行予定/早期公開済)

原著論文

- 矢守克也・飯尾能久・城下英行(受理 2020/10/11) <https://doi.org/10.2130/jjesp.2009>
地震学のオープンサイエンス
——地震観測所のサイエンスミュージアム・プロジェクトをめぐって——
- 向井智哉・藤野京子(受理 2020/11/17) <https://doi.org/10.2130/jjesp.2001>
少年犯罪に対する厳罰志向性と犯罪不安および被害リスク知覚の関連
——先行要因としての子どもイメージに着目して——

- 清水佑輔・岡田謙介・唐沢かおり (受理 2020/12/9) <https://doi.org/10.2130/jjesp.2008>
愛好家サブカテゴリーの顕現化によるギャングラーへの潜在的態度の肯定化

展望論文

- 矢守克也 (受理 2020/9/2) <https://doi.org/10.2130/jjesp.2006>
〈実験社会心理学研究〉に関する研究

尾崎山佳 副編集長コメント

次号 (60 巻 2 号) には原著論文 3 編、展望論文 1 編が掲載されます。本年度はコロナ禍のさなかにあり、さまざまな制約のある中で研究を進めることに困難を覚えた先生方も多かったのではないかと拝察いたします。こうした状況にも関わらず、本誌には例年とくらべても遜色のない投稿数および掲載数がありました。また、査読過程においても多くの先生方から貴重なご助言をいただき、論文掲載に向けて大きな推進力となりました。こうした会員の皆様のアクティブなご様子を目の当たりにし、逆境の中でも研究活動をスローダウンさせることなく、精力的に続けられているというレジリエンスの高さに感嘆しておりました。こうした皆様のご尽力が次号にも結実しておりますので、ぜひご高覧ください。また今後も変わらぬご支援を賜りたく、宜しく願い申し上げます。

会員異動

新入会員 — 3 名 (2020 年 8 月 ~ 2021 年 1 月)

一般 仁科国之
学生 高橋憲司、鈴木雄大

退会会員 — 2 名 (2020 年 4 月 ~ 2021 年 1 月)

一般 木村 純、神崎正哉

☆☆☆ グルダイ学会関係連絡先 ☆☆☆

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等の変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどの配信先の登録・変更・停止等の連絡先として、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミクス学会 事務支局

〒 602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る 中西印刷 (株) 学会フォーラム内

TEL : 075-415-3661 FAX : 075-415-3662

E-mail : jgda@nacos.com

学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミクス学会本部事務局

〒 663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46 武庫川女子大学 西道研究室

TEL : 0742-44-1251 (代表)

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミクス学会 編集事務局

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る 中西印刷 (株) 営業部編集校正課内

TEL : 075-441-3155 FAX : 075-417-2050

E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

広報関連【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、 新刊案内や研究会案内等のニュース記事、書評、公募情報など】

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学文学部 杉浦淳吉 研究室 (広報担当 常任理事)

※ 鶴子修司 (広報補佐員)

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

(マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください)